

調査の目的と方法

1. 調査の目的

日本看護協会は昭和26年に当時の全会員8万人余を対象として実態調査を実施した。その後昭和40年より4年毎に定期的な会員実態調査を実施している。今回の昭和56年会員実態調査はその定期的調査の5回目にあたる。

本調査では毎回会員の属性、労働条件、勤務状況等を調査してきたが、今回は、それに加えて、「会員にとっての看護協会活動」という特別テーマを設定し、会員と協会とのつながりの実態や意識を明らかにすることも意図している。これは、昭和56年に、本会が部会別組織から本会一本に統合改組するなど、協会組織や活動のあり方を考える時期にきていることを考慮し、その資料とするためである。

2. 調査の時期

昭和56年10月現在を調査時点とした。

3. 調査対象

昭和56年7月31日現在の日本看護協会会員228,898名を母集団とする7,318名を調査した。

4. 調査方法

層別系統抽出による標本調査法を用い、職能別に次のように無作為抽出した。

保健婦職能	15,937名より	548名
助産婦職能	9,605名より	354名
看護婦職能	203,356名より	6,416名
	計	7,318名

必要標本数の決定は、前回昭和52年調査の年齢の平均と標準偏差により以下のように算出した。

- 昭和52年会員全体の平均年齢 m : 35.1
- 会員全体の年齢の標準偏差 δ : 10.7
- ・保健婦部会会員の平均年齢 38.5
- 保健婦部会会員の年齢の標準偏差 11.2
- ・助産婦部会会員の平均年齢 38.3
- 助産婦部会会員の年齢の標準偏差 12.0
- ・看護婦部会会員の平均年齢 33.9
- 看護婦部会会員の年齢の標準偏差 10.3

必要標本数 N は、下記の式により算出することができる。

ただし、目標相対精度 (δ_1^2) 0.01

信頼水準 95% とした。

$$N = \frac{M}{\frac{(M-1)\delta_1^2 m^2}{4\delta^2} + 1} \quad M: \text{母集団 (会員総数)}$$

$$= \frac{228,898}{\frac{(228,898-1) \times 0.01^2 \times 35.1^2}{4 \times 10.7^2} + 1}$$

$$\div 3,658$$

ネイマンの最適配分により、各職能別の必要標本数を次の通り算出した。

- ・保健婦職能の必要標本数 N_1

$$N_1 = 3,658 \times \frac{15,937 \times 11.2}{15,937 \times 11.2 + 9,605 \times 12.0 + 203,356 \times 10.3}$$

$$= 3,658 \times \frac{15,937 \times 11.2}{2388321.2}$$

$$\div 274$$

・助産婦職能の必要標本数 N_2

$$N_2 = 3,658 \times \frac{9,605 \times 12.0}{15,937 \times 11.2 + 9,605 \times 12.0 + 203,356 \times 10.3}$$

$$= 3,658 \times \frac{9,605 \times 12.0}{2388321.2}$$

≒ 177

・看護婦職能の必要標本数 N_3

$$N_3 = 3,658 \times \frac{203,356 \times 10.3}{15,937 \times 11.2 + 9,605 \times 12.0 + 203,356 \times 10.3}$$

$$= 3,658 \times \frac{203,356 \times 10.3}{2388321.2}$$

≒ 3,208

合計 $N_1 + N_2 + N_3 = 3,659$

ただし、調査票回収率を50%を見込み、3,659票回収するため、抽出標本数は各職能とも、2倍をとり、合計7,318票とした。

抽出台帳としては、会員の会費納入票を用い、対象となった会員に本部より直接調査票を郵送した。回収は、本人記入の上、直接本部に返送とした(協会宛返送封筒同封)。

5. 回収・点検・集計

昭和57年1月末2,944票回収し、そのうち、有効回収数は、2,935票であった。回収率は、40.2%。必要標本数に対する回収率は、80.2%である。

回収票2,935票のとき、実績相対精度(δ_2)を改めて計算すると、

母集団 228,898

標本数 2,935

昭和56年調査時会員の平均年齢36.0

同年齢の標準偏差 11.1

$$\delta_2 = 2 \sqrt{\frac{M-N}{M-1} \cdot \frac{\delta^2}{N} \cdot \frac{1}{m^2}}$$

$$= 2 \sqrt{\frac{228,898 - 2,935}{228,898 - 1} \times \frac{11.1^2}{2,935} \times \frac{1}{36.0^2}}$$

$$\div 0.011$$

従って、 $\delta_1 \div \delta_2$ となり、目標相対精度0.01を維持することができた。なお、記入の点検・集計は、普及開発部調査研究係が行った。集計はコンピュータによる。

6. 本報告の構成

本報告は、2部にわたる分析と統計篇の集計一覧とにより構成される。

第1部は、会員の基本的属性、勤務状況、労働条件について今回の調査結果と、昭和40年会員実態調査以降16年間の年次推移とを分析、報告した。

なお、病院における看護職については、昭和50年と昭和54年に、詳しい労働実態調査が行われている。会員実態調査の中間に労働実態調査がはさまみこまれているわけで、病院等の看護職については、2年おきに労働条件が、迎れる状況となっている。そこで第1部Ⅲ労働条件では、会員全体の4年おきの経年比較と並行して、病院勤務看護職のみの2年おきの経年比較も行った。そのため、第1部Ⅲ労働条件の経年比較一覧は二本立てとなっている。即ち、40, 44, 48, 52, 56年の会員全体の実態調査の経年比較表aシリーズと、病院勤務者だけを再集計し50, 52年の労働実態調査も加えて一覧した表bシリーズである。

最近とみに変化のはげしい日本の婦人労働市場の中で、伝統ある看護職の労働実態を、昭和40年より16年間にわたりその経過を記録することは意義あることと考え、できうるかぎりの情報を過去

の調査報告書より忠実に採録することにつとめた。年度によっては同じカテゴリーの調査結果が得られないものもあったが、原則として、集めうるデータはすべてとりあげ一覧した。

第2部では今回調査の特別テーマである「会員にとっての看護協会活動」について、会員の協会活動参加の実態や意識と会員の属性との関係を軸にとりまとめた。

巻末の統計篇には、昭和56年会員実態調査について会員の基本的属性、勤務状況、労働条件、会員意識についてのさまざまな分析軸によるクロス集計を掲載した。目次の統計結果表一覧及び、巻末の統計結果表早見一覧表にみられるように主なる分析軸は、年齢、業務、職位、勤務場所、病院設置主体別等である。本文では経年比較データの

提供に主眼をおいたので、各項目の解析は統計篇のクロス集計より読みとっていただくことを期待している。

7. 調査の担当

昭和56年調査の設計、標本抽出、回収、集計については普及開発部調査研究係岡田実(元職員)が担当した。岡田の後を引き継ぎ、機械集計と分析、及び過去5回にさかのぼる経年比較を同部嘱託高橋博子が担当し報告書をとりまとめた。第2部については、同部調査研究係菊池令子が執筆した。

また過去の報告書よりのデータ収集作業については、調査研究係松原美知子、宮本知枝が協力した。